学校へ行けない子どもたち

上から目線の指導が通用する時代は終了しました。先生がモデルとなり、自己と対話し他者とかかわり成長を遂げる。このこと自体が不登校の子どもたちにとっての支援なのです。

あいあいネットワークof HRS
深美 隆司

ふかみ・たかし
32年間中学校教員を務め、2011年に退職。「あいあいネットワークof HRS（http://www.aiainet-hrs.jp/）」を立ち上げ、教員研修、授業コーディネーションなどに取り組んでいる。

社会の変化と教育への影響

私は2011年まで32年間、大阪府松原市で中学校教員をしていました。教員になった当初は、学校を休む子はほとんどおらず、出席簿を広げたイメージカラーは「真っ白」でした。ところが、いつのころからか、休みがちな子どもへの支援が増えはじめ、遅刻や早退のチェックを含めて出席簿は「グレー」に変わっていったのです。

研修や授業コーディネーションの仕事をはじめて、過去を振り返ってみると、はっきりと社会の変化が存在していたということに気づきました。一般的には「成長社会」から「成熟社会」への変化と言われているのですが、1990年代中盤が変化の境目になっていたのです。①バブル崩壊に端を発したインフレからデフレへの移行、②高度情報化、③少子高齢化と家族の「個族」化、④地域社会のグローバル化、という四つの大きな変化がこの時期に集中してはじまっていました。自然災害であれば、目に見えた驚異と被害をもたらしますが、社会の変化は音もなく訪れ、私たちに多大な影響をもたらすのです。

それまでは、「学校は休んではいけない」「先生は信頼しなければならない」というものが当たり前のように存在していました。ところが、この教育にとっての大きな枠組みはもろくも崩れ去ることになります。デフレの進行により、保護者がリストラに遭い生活苦に陥るケースが増えました。終身雇用制が見直されたのち能力主義が導入され、さらに非正規雇用の割合が増えることにより、賃金の二極化が進んだのです。つまり「将来への不安」と家族崩壊へのつながりです。

さらに、高度情報化社会へ移行したことにより、さまざまな情報の一般化・共有化が進みました。情報や知識という面においては、

学校のみが主な発信基地ではなくなったということなのです。さらに携帯からスマホへと発展した情報端末は、24時間さまざまなものを楽しむことのできるエンターテインメントツールとなりました。動画配信による「神授業」をうたった予備校も現れているくらいですから、ライブ配信の小学校、中学校の双方向授業コンテンツを売りにする塾などが出現するのも時間の問題でしょう。そして、特定の分野では、学校の先生よりも知識やスキルをもった子どもたちが普通に出現しているのです。

学校は周りに存在していた大きな枠組みを失うと同時に、学校がもっていた「権威」をも失うことになりました。もはや「上から目線の指導」が通用していた時代は終了し、子どもたちもまた学校へ行く意味を見失っているのです。

そもそも、学校というものは、知識やスキルなどを含めた「キャリアの獲得」と「心の成長」を保障する場です。心の成長というものは、自己と他者との関係性で育つものですが、成長社会の中では概ね置き去りにされてきました。成長社会で生きてきたベテラン教員は自信をなくし、その教育のもとで育った若手は右往左往することとなったのです。

学校へ行けない子どもたち

教員だったころ、私は多くの不登校の子どもたちのケースにかかわりました。必要な支援によって三次支援（支援チーム＋関係諸機関）、二次支援（支援チーム）、一次支援（担任＋α）に分けていました。支援会議では、三次支援から順に情報を共有しながら見立てをしていきます。学校に行けなくなった「引き金」、その状況に至った「要因」、そして本人の「現れ（見えている状態）」などを明らかにすることで「内面（心の状態）」を探っていくのです。子どもたちのありようは多様です。一つとして同じケースというものはありえないのですが、あえて主たる共通項を探せば、「現れ」と「内面」の乖離（かいり）ということを挙げることができます。

一人の人間の成長というものは、「現れ」と「内面」が手を取り合うように共に成長していくものです。高校生になればそれにふさわしい「現れ＆内面」が、社会人になれば社会人らしい「現れ＆内面」が、ということです。しかし、親からの過干渉や過度の期待などを受けると、「現れ」が「内面」よりも優先してしまうのです。親の愛情を求めるあまり「親の期待に応える現れ」をつくり出そうとします。そして、「～してほしい」「～したい」という子どもらしい「内面」を封印してしまうのです。このような子どもは「現れ」を非常に重視していますので、周りから見れば「非常に良い子」ですし、勉強も頑張ります。半面、自分自身の「内面」を無意識のうちに圧迫し続けているのです。圧迫されてきた「内面」は、成長することなく置き去りにされます。つまり、「現れ」と「内面」との間に顕著な乖離が生じることになります。この乖離は、ちょっとしたことでも「引き金」になり、「現れ」の破綻（墜落）を起こし、「現れ」は「内面」の所まで落ち込んでしまうのです。いじめやもめ事はもちろん、小学生から中学生になる過程（段差・ギャップ）ですら「引き金」になります。これは心理学では「幼児退行（幼児がえり）」と呼ばれ、人間の防衛機制の一つとされています。親から離れられなくなり、学校へも行けなくなります。この乖離

の構造は、攻撃的な子どもであっても基本的には同じです。他者への攻撃や妄言を繰り返すうちに「現れ」と「内面」の間に乖離を起こしてしまうのです。

学校へ行けない先生

コミュニケーション力向上のための研修や授業コーディネーションに携わっていると、自然な流れとして、学校の先生や保護者から相談を受けるケースが度々あります。その多くは「自分に自信がない」というものです。その中で、こんなことがありました。大阪の都市部にある中規模の中学校で研修をしたのですが、後日、お世話をしてくださった若手の女性の先生に、お礼のメールを送りました。そして、受けとった返信に私は愕然としたのです。「実は、私、研修の日を最後に学校を休んでいます」と。私は、急遽彼女と面談をしました。話を聴くと、責任ある立場に立った自分が出す提案に、先輩教員からことあるごとに叱責や非難を受け、それに耐えられなくなってしまった、というのです。

その日からほぼ毎日のメール交換がはじまりました。彼女は休み休みですが仕事を続け、一進一退の状態が続きました。しかし、ある日のこと、とうとう家から出ることができなくなったのです。私は、再度面談をし、認知行動療法（ソーシャルスキルトレーニング）を紹介しました。最近では医療でも取り上げられている手法なのですが、①その日にあったことと感じたことをノートに書き出す。②その中に、ネガティブな要素を探しチェックを入れる。③ネガティブな要素をポジティブに書き換える、という簡単なものです。つまり、「自分自身との対話を促進し、客観的に自分をとらえる」ということです。彼女は自分自身に自信がもてず、さらに完璧主義でした。完璧主義によってもち上げられていた「現れ」が、自信のない「内面」と大きく乖離していたのです。そして、先輩教員からの叱責が「引き金」となっていました。

一時は「休職か退職か」というところまで追い込まれていたのですが、4カ月目を過ぎたあたりから彼女からのメール回数が減ってきたのです。そして5カ月目、彼女からの最後のメールにこう書いてありました。「全ての答えは自分自身の中にあるのですね」と。私は、「やったー！ もう大丈夫」と確信できました。以降、彼女は職場に復帰したのです。自分自身と対話することにより、「内面」と「現れ」を一つのものにすることができました。一進一退はまだまだ続くのでしょうが、彼女の中にはっきりと「自分」というものが誕生したのです。

小学校・中学校はセーフティーネット

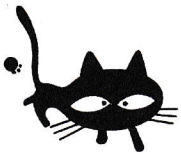
ある機関の調査によると、大人でひきこもっている人の中で不登校経験者の割合はわずか3分の1だったそうです。不登校（ひきこもり）は「誰にでも起こりうる」とよく言われますが、この結果は「誰でも、全世代的に起こりうる」ということを表しています。先生方にはあまり自覚してもらってませんが、義務教育である小・中学校は、子どもたちにとってのセーフティーネットでもあるのです。高校生以上の大人になって不登校やひきこもりになると、支援する機関は存在しますが、当事者は極めて厳しい状況に追い込まれます。その点、義務教育においては、先生方

が子どもたちをしっかりと見守ってくれています。先生方から手厚い支援が行われ、必要とあれば関係諸機関へも引き継いでくれます。

これからの時代、「現れ」と「内面」がともに成長し、他者とかかわっていくことが要求されています。この力は、さまざまなグループアプローチ（個人の成長を基軸に据えた手法）から生み出された人間関係プログラムが実現してくれます。人間関係プログラムは、自己管理力（自律）と思いやり（共感）を育てます。さらに子どもたちばかりでなく、先生方が個人を超えて学年や学校単位で実施すれば、先生方もそのグループの一員として成長を遂げることができるのです。つまり、成長しようとする大人が、大人になろうとしている子どもたちの人間としてのモデルと理想となろうとするからです。このことは、人間関係プログラムを実施している島根県松江市立第一中学校、高知県土佐清水市立清水中学校などでの実践が証明してくれています。先生や子どもたちが、「自己と対話し、他者と折り合いをつけてつながる」ことを実践しています。ファシリテーション&ワークショップがもっている力なのです。

【参考文献】

・深美隆司『子どもと先生がともに育つ人間力向上の授業』図書文化社　2013
・貝谷久宣・福井至監修『図解やさしくわかる認知行動療法』ナツメ社　2012
・島根県松江市立第一中学校「こころ♡ほっとタイム」研究会・あいあいネットワーク of HRS 深美隆司編著『いじめ・不登校を防止する人間関係プログラム～アクティブラーニングで学校が劇的に変わる！』学事出版　2016
・岡崎哲也「清水中学校はガイダンスカウンセリングで劇的に変わった！～人間関係プログラムの力」『指導と評価』2017年4月号　図書文化社



いじめ・不登校を防止する人間関係プログラム

～アクティブラーニングで学校が劇的に変わる！～

島根県松江市立第一中学校「こころほっとタイム」研究会・あいあいネットワーク of HRS 深美隆司 編著

●定価（本体2,000円+税）／B5判・144頁／ISBN978-4-7619-2245-0

★「自分の行動をふりかえり、まわりの意見を聴いて、次の行動に生かす」という、人間としての成長を促進する「人間関係プログラム」による支援プラン集。コミュニケーション力や人間力を育成し、いじめ・不登校の未然防止に役立ちます。

学事出版 千代田区外神田2-2-3 TEL03-3253-4626 FAX 0120-655-514 http://www.gakuji.co.jp